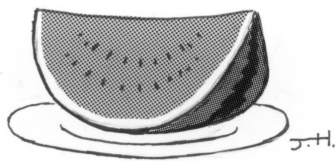


味の記憶

南無阿弥陀仏は

夏果物への誘い道

—文学と食を愛するハイパー編集記者・ぼのぼ氏の、
わくわくエッセイコラム。忘れられない子供時代の味の
数々と共に、昭和の悪ガキがよみがえる！



● 托鉢僧がやってくる

ズシャンズシャン

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

ジャラジャラジャラ

錫をつけた金尺棒を打ち鳴らし、念仏を唱えながら托鉢僧が玄関にやってきた。大きな深編みの網代笠をかぶり、瘦身だが筋骨のがつしりした体軀を白と黒の僧衣で包み、片手に数珠を握りひたすら念仏を唱える。そのあとは小鉢を掲げて祈りのポーズ。布施米の所望である。おそらく年齢は四十代くらいであろうか。すると、母が米櫃から一合升に生米を盛り、僧の差し出す小鉢に布施米する。お経を唱えてもらったことへの謝意である。布施米といえどばふつうは生米だが、釜米の残り飯を盛ることも。こうした光景は日常で珍しくなかった。

托鉢は禅宗の僧の修行の一つだが、戦後、帰還兵で社会復帰できずに出家して托鉢僧になったものも少なからずいた。一部には焼け跡の極貧窮乏時代にしようがなく偽僧となり托鉢に向かう者もいたようだ。まだ戦後の傷跡がほのかに残っていた時代、世間も戦争で傷ついた者には寛大であったのだ。

しかし、そんな悲哀など知らない子どもがもつばら気になっていたのは、托鉢僧が小鉢を僧衣の袖口にしま

う様子であった。

〈残り飯ならすぐに食べられるからよいが、生米をいっただいどうするのだろうか？ 携帯する鍋釜があるわけでもなし、どうやって生米を炊くのか？ どこかに隠れ棲み処があるのだろうか？〉

自分にとつては托鉢僧がひどく謎めいた存在であった。托鉢僧が来ると私はつけ回した。托鉢僧は近所の各家を托鉢して回ると、すたすたと急ぎ足で裏山に続く畦道を去っていく。子どもだと走り続けなかついていけない速さで、あつという間に置き去りにされてしまう。

だが、幼い私でも偽の托鉢僧は見分けることができる。本物は寡黙でこちらがつけ回しても黙礼するだけで念仏をひたすら唱え、その姿に威厳があるが、偽物はこちらがちよっかいを出すど、念仏を中断して「うむむ？」というような反応を示す。そして、なんともいっても足取りが違う。子どもでも頑張ればついていける速さなのだ。

いつものように家にやって来た偽托鉢僧をつけ回していると、私の存在がうるさいらしく、しまいにはすたすた蟹股で走り去っていった。その姿はどこかでみたような。そう、勝新の「座頭市走り」だ。

● 座頭市はいつか来たかい

で、すぐ連想するのは兄のこと。この頃、映画「座頭市物語」が放映され爆発的なヒットをおさめていた。市内に住む映画好きの叔母さんに映画館に連れて行ってもらい、それを封切後にいち早く観た兄は、すっかりその虜になつてしまい、登下校でも「座頭市走り」を真似ていた。

「よござんすね、よござんすね、先を失礼しますすよ、兄さんたち〜」と、目を半開きにしてそっくり返るような姿ですたすたと小走り。手には仕込み杖ならぬ家にあつた古杖を持ち歩き、一緒に遊ぼうと私やマサアキが不用意に近づくと、いきなり古杖での居合い抜き。

「ど目くららと思つてなめると、痛い目見るよ、兄さんたち」捨て台詞に下手なダジャレも必ず入るのが兄。こちらは、杖で叩かれて痛いなの、それどころじゃない。近所の悪ガキを集めての遊びももつばら座頭市ごっこになった。

兄は当然のことながら座頭市役で、兄の遊び友のツヨシは浪人で用心棒の平手造酒役、ヒトミや姉は悪党にかどわかされそうになる娘役、そしてわれわれ年少組は地回りのチンピラ役。痛だけの役回りだ。

基本はチャンバラごっこだから、姉やヒトミはやがて飽きて相手にしなくなる。これで座頭市ごっこも終わりで

やれやれと思っていたら、なんと代役にあのブラッシー・マユミがお姫様役に。

マユミはチャンバラ好きで嬉々として何度でも座頭市ごっこをやっていたが、興奮してくると「ガルルー」と唸り、まるでお姫様役とは程遠いのだが、自らの座頭市演技に自惚れて悦に入っている兄は、何度でもアンコールに応じるのだ。

その度にマサアキやシゲキと私は斬られ役で痛い目に合うのだから、たまったものではない。

へこんな痛くてつらい遊びがいつまで続くのやら

と、先を案じていたら、それほど長くは続かなかった。

●学校の呼び出し

というのも、兄が学校でひと騒動をやらかしたのだ。

兄は当時としては珍しいバスで、家から遠い市内の学校に通っていた。大学習属の共学の小学校で、どちらかというとお坊ちゃんお嬢ちゃん学校である。悪ガキ連のガキ大将である兄はその中では浮く存在であった。成績も下から数えた方が早いし、イタズラばかりするから当然のことながら先生から目をつけられる。

それにめげることなく、兄は休みも

せず遅刻もせず学校大好きで毎日通っていたから傍から見ると不思議だが、もちろん、そんな学校でも悪仲間はいるものだ。兄はひょうきんで人懐こいから人気もある。やんちゃな連中と集まって休み時間や放課後にいたずらして遊ぶのが何より楽しいのである。

おまけに市内には兄を可愛がっている叔母がいた。何かという映画館に連れて行ったり、飲食店にも頻繁に連れて行つてうまいものを食べさせてくれたりするのだ。映画で遅くなったときは叔母の家にお泊りということもしよつちゅうで、まあ好き放題していたのである。

しかし、この時はやはり少々分が悪かった。

学校の体育の時間の終わりに、噴水式の水飲み場で女子連中がずらりと並んで水を飲んでいたら、兄が後ろから駆け抜けながら彼女らの後頭部をガツンガツンガツンと叩いて回り、女の子たちが水道の噴水口に口元をぶつけて中には歯が欠けた者もあり、大騒動になったのである。

学校から連絡があった母は青ざめていた。翌日に学校に行くことになり、その日兄は帰ってこなかった。数日自宅謹慎を言い渡された兄の引き取りには、急なことなので叔母が立ち合ったのだ。

この騒動は、学校の職員会議でも大

学校から連絡があった母は青ざめていた。翌日に学校に行くことになり、その日兄は帰ってこなかった。数日自宅謹慎を言い渡された兄の引き取りには、急なことなので叔母が立ち合ったのだ。

この騒動は、学校の職員会議でも大いに紛糾したようで、すっかり「開闢以来の悪童」という学校での兄の評判は定着した。担任からは「あなたは付属の子やない」とまで言われたそうである。

しかし、処分の方は、小学生ということからさすがに停学処分は免れ、被害にあった女子たちの親も大げさにする必要はないということで矛をおさめ、自宅謹慎は三、四日ほどで解除となった。その間、兄は叔母の家で謹慎していた。遠距離通学も学校で問題になったからである。

●神頼み

日頃から兄の素行に思い悩んでいた母は神頼みに走った。ヒトミの母親から知り合いの祈祷師を紹介され、そこに私を連れて兄の改心を祈祷しにいったのである。どちらかという迷信深い母ではあったが、そこまでするのは。その時の祈祷師の姿は幼い私に強烈な記憶として残っている。

通された部屋は十畳くらいのがらん

とした部屋。大きな丸い鏡が祀られた一段高い祭壇の前には護摩を焚く炎が赤々と燃えさかり、白装束の老婆が、長い髪を振り乱し短冊状の白紙を束ねた房棒をふり一心不乱に祈禱している。どう見ても狂女にしか見えない。その老婆が母が持参した兄の写真を見て、

「この子には祖先の悪霊が取りつきちよる。今のうちに悪霊をとり除かねば取り返しの付かないことになるぞ」と、のたまうのだ。そしてやにわに兄の写真を鏡に貼り付け、

「オンバサラダー、オンバサラダー、悪霊退散！ オンバサラダー、オンバサラダー、悪霊退散……」（祈禱の文句は正確には覚えていないが、まあこのような調子）と祈禱を始めたのである。

さすがの母もこれには食傷したらしく、祈禱代を置いて、そそくさと退散したという次第。

なにせヒトミの母親の紹介である。周りにはおせっかいなほど親切で陽気で明るい人だが、子どもたちの間では、野良犬や野良猫にはいたって冷たい「毒盛おばさん」として名を馳せている。とくに動物好きのツヨシには大敵である。しかし、夫が結核療養に心臓を患ったりと病弱なため、祈禱師に入れ込んだりもしたのでろう。まあ同情する余地はあるが、この祈禱師はや

はりインチキの類であったのだろう、母も一回訪れただけで二度と行くことはなかった。

● 広瀬川の渡し

しかし、いくら家の規律が厳しくなろうと、それに唯々諾々とき従う私たちではない。母の目を盗んでは新たな冒険へと走るのである。兄のひと騒動からまもなく夏休みに入った。血が騒ぐ季節である。私も映画「座頭市物語」を観に行ったのである。

映画は下総の水郷地帯で繰り広げられる飯岡助五郎と笹川繁蔵の争いが舞台、おなじみ天保水滸伝をベースに座頭市が絡むという趣向だ。大川を舟で下る渡し場のシーンも見どころだ。これに限らず、時代劇では、川の渡し場のシーンがよく出てくるが、時代劇ファンのお私としては、この渡し場シーンをぜひ一度はやってみたい。

親に隠れて兄弟で行った夏休みのプールで溺れながらもようやく泳ぎを覚えた私。さらなる挑戦とばかりに、広瀬川の渡し場の冒険を企てた。

広瀬はもとは漁村だった土地柄、日向灘に流れ込む広瀬川の河口近くには、大きな木舟が葦の生えた河岸に半ば放置されたように係留してある。この頃、私はいろんな所に遠征していたので、家からは4、5キロとかなり遠

いが、広瀬川の河口近くにも一人冒険のつもりで遠征していたのだ。

背丈ほどの葦が茂り、その中に浮かぶ木舟は、誰も使っていないようだ。舟には長い竹竿が二本無造作に積んである。水中に竿を差して漕ぎ出せば、向こう岸までは100m足らず。川を横断して渡るのもそう難しいことではないように思えた。

ただ、舟を漕いだことはない。映画では舟頭が舟尾に立ち身体全体を使って櫂を漕いでいたが、はたして自分の力だけで漕げるものか、ちよつと不安であった。

「マサアキと一緒に何とかなるだろう」

そう考え、マサアキと、ついでにヒロシもこの企てに誘うことにした。

「大丈夫か？ 俺は泳げるけど、ヒロシはカナヅチや」

「あいつ泣き虫やけど意外と力はあるから。舟を漕ぐのに力があるから」

そんな企み話を縁側こそそしていたら、いつの間にか二人の後ろにマユミが立っていた。

「私も行く！」

「何をいよつとね、お前は泳げんやろ、留守番してろ」

とマサアキがマユミを諭すように言うけれど、言い出したら聞かないマユミである。

「イヤじゃ、連れて行かんかったら

母ちゃんに言うから」

そういわれたら連れて行かないわけにはいかない。

ヒロシは最初渋っていたが、話を聞いていた弟のテツが行きたいと言い出して、そうなると思えば行かすわけにもいかず、結局総勢5人で出かけることになった。

一行は町なかを通り橋のたもとを折れて、川沿いに河口に向かって進んでいった。

「ほんと大丈夫ね、引き返すなら今やで」

ヒロシが早くも不安げに話しかけてきた。

「丈夫な舟やから心配ない」と

と私はいい加減に答えていた。そして、木舟が係留されている葦が茂る川岸にたどり着くと、皆に声をかけた。

「ここにある舟じゃが、どうや壊れてないやろう、竹竿も二本ついとつとよ」

「ほんとじゃ、これなら5人は余裕で乗れるね」

とマサアキが歓声を上げた。

「穴があいてたりせんぞ？」

再びヒロシが不安げに問いかけてきた。

「穴が空いていたら、こんなに浮かんどらんやろ」

テツがいつものことといわんばかりに兄に口答える。

まず、私が先に乗り、ついでヒロシ、

そしてテツ、次にマユミ、最後はマサ

アキの順で大きな木舟に乗り込んだ。

舳先を向こう岸の方に向け、後尾についたマサアキが川岸の杭につないであつた係留綱をはずす。

「さあ、出発進行や」

海の方に向かって吹いている風が、心かすかに潮の匂いも混ざって心地よい。私が舟頭で水中に竿を差すと、ゆ

っくりと舟は川岸を離れて葦原をかき

分け川中央に向かいだす。舟尾でマサアキが舵を取るように竿を操っている。

予想以上に、子どもの力では骨が折れる。自分たちが向かおうとする方向に思うように進まないのだ。

それでも舟はするすると進んでいく。

「わーい、気持ちいいねえ」

マユミがはしゃいでいる。ヒロシもテツもそよぐ風にうっとりとした表情で乗舟を楽しんでいる。

その中で、私とマサアキは必死で舟の方向を向こう岸に向かわせようとしていた。だが、なかなかうまくいかない。しだいに、舟は向こう岸ではなく、

河口に向かって進んでいった。最初に異変に気付いたのはヒロシである。

「大変や、舟が流されちよる！ どううすつと？」

「ヒロシ、俺より力あるやろ。漕ぐ

のかわれ」

と私が言うと、ヒロシが青ざめる。

「俺、やったことないからどうすれ

ばいいん？」

「水中に竿を差して思いつきり漕ぐと。場所かわるぞ」

と二人の体を立って入れ替えようとした途端、舟が不安定になつて揺れ出した。

「うへえ〜」

二人はあやうく川へ投げ出されそうになった。慌てて舳先にしゃがんでしがみつくとヒロシ、私は私で舟底にストンと尻餅をついた。

入れ替わったヒロシは必死で竿を水中にもぐらせて思いつきり漕ぐが、思う方向に進まない。

「俺、泳げんと。どうしよう、この

ままじゃ海に流れていってしまう」

ヒロシが泣きべそをかいた。

マユミもテツもようやく事態を把握したらしく、だんまり状態に。

「大丈夫じゃ、何とかなる」

私とマサアキは空元気で叫ぶ。さらに、私は両手を使って必死に水をかく。しかし、舟は無情にもどんどん河口の方に流されていく。速度も幾分早まっているようだ。だんだん町が遠ざかっ

ていくのである。みな心細くなり、ついにヒロシとテツがわーつと泣き出した。あの気の強いマユミでさえ泣きべ

そをかいている。万事窮すなのである。

するとそこに、
「こらー、お前たちは何しよつとか
ー！」

と、河口付近で船釣りしていたおじい
さんの怒声が。

「こんイタズラガキどもがー、じつと
してろ、そのまま、助けちゃるけ」

私にはその怒声が、仏様のように聞こ
えた。地獄に仏の気分であつたのだ。

●お遍路マイロード

皆で秘密にしておこうと取り決めたこ
の船遊び事件は「悪事千里を走る」のな
らいで、すぐに母の知ることとなつた。
助けしてくれたじいさんが、母がひいきに
していた魚屋のご隠居爺さんだったので
ある。母と私が魚屋に買い物に行った時
に、たまたまその爺さんが店に顔を出し
ていて、今回の一件の顛末がすっかり知
れることとなつたのだ。母の、それは怒
るまいことか。前の兄の学校事件も重な
ってその怒りはすさまじかつた。

というわけで、私は当分の間、外出禁止・
塾居謹慎という厳しいお沙汰とあいなつ
た。兄は母親の剣幕におそれをなしてか、
夏休みであることをいいことに市内の叔
母の家に避難していた。姉は姉で仲のい
い女友達と臨海学校に行っていた。

腕白坊主にとつて、元気な時の外出禁止
は拷問に近い。毎日じりじりと一人時代

劇ごつこを縁側でやりながら過ごすしか
ないが、その空しいこと限りなし。

そんな退屈な日々が数日続いたころ、あ
のいつもの托鉢僧が夕飯前にやってき
た。

ズシャンズシャン

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

ジャラジャラジャラ

錫をつけた金尺棒を打ち鳴らし、ひた
すら念仏を唱えての托鉢である。すると、
これまたいつものように、母が米櫃の生
米を僧の差し出す小鉢に盛って布施米と
した。

「よーし、今日こそは坊さんの隠れ家
を見つけてやるぞ」

母が、去っていく托鉢僧の後ろ姿に手
を合わせ、台所に引っこんだ隙をねらい、
私は家を飛び出し托鉢僧の後を追いか
けた。

あつという間に遠ざかる托鉢僧。それ
を必死に追いかける私。行けども行けど
も追いつかない。数キロは優に超えてい
た。畦道はやがて山間へとさしかかり、
気が付いたら周りほとんど暗くなる。
それまでに通つたこともない遠路で、こ
の裏道は弘法大師ゆかりのお遍路街道で
もあつた。だんだん暗くなるなかで、つ
いに坊さんを見失ってしまったのだ。

家の中の一人遊びは空しいが、一人ほ
つちの山道は心細いことこの上ない。今
引き返せば、閻魔様のように角を付きだ

した母親の怖い顔が目には浮かぶ。今さら
引き返せない。

「そうだ、この辺りに親戚の家がある
はずだ」

母が、あの家はこの山の北側の麓に位
置すると言っていたのを思い出したので
ある。

いつもは親とバスや自転車でも東側の
国道沿いに行くので、この西側の裏街道
は使ったことないが、この峠を降りた北
側の山の麓に行けば、たどり着けるに違
いない。

「よし、行ってみよう」

そう心に決めた私は、心を奮い立たせ
るように、

♪おかをこーえ、いこうよ♪

と、NHKみんなの歌の人気ソングを
空元気を出して歌いながら峠を登って行
った。空には月と星が出ているから、足
元に蹴躓くことはない。しかし、辺りは
すっかり暗くなり、畦道沿いの雑木林が
ざわざわと音を立て、フクロウの鳴き声
が夜空にこだまする。

元々は怖がりの私だ。寝る前に兄や姉
がわざとお化けの話をして、夜中に起き
だして寝間から廊下づたいに離れた厠に
行くのもびくびくする。厠の裏手はずぐ
山が迫り不気味なのである。

そんな私があるうことか、ひとり夜の
峠道を歩いているのだ。もう目と耳を塞
ぎたい気持である。でも、先に進まない

ことには親戚の家にもたどり着かない。できるだけ周りを見ないようにし、ひたすら足元だけを見ながら歩いて行った。

こういう時は楽しみなことを考えるのが一番である。親戚の家の広大な庭にはブドウ園があり、ビニールハウスでスイカも栽培している。夏そこに行くと、その美味しい採れたての果物にありつくのが何よりの楽しみである。

そして、バスクリンを入れた風呂も欠かせない。最新の太陽光で暖める温水プレートを使用した風呂で、ゆったり寛げるのだ。我が家の、入浴する度に緊張を強いられる五右衛門風呂とは段違いである。

へ行ったら、スイカとブドウ、バスクリン

そう心で唱えながら峠をひたすら登って行った。

やつとこのことで峠を越えると視界が開け、林間に麓の家々の光が見えてきた。そうなると幾分勇気が湧いてくる。下り坂なので、次第に急ぎ足、やがて駆け足で一気に峠道を下った。

するとぼつんぼつんと人家が近づいてきた。ここまで来れば大丈夫だ。

空を見上げると、月と星が登り坂の時より格段に晴れやかに輝いている。心の持ちようで風景がこんなに違って見えるのだ。

しばらく行くと、見覚えのある赤い瓦

屋根とそこに設置された太陽光式の温水プレートが見えてきて、一挙に心の緊張がほどけた。

●スイカとブドウにバスクリン、これぞ至福のとき

私が一人で夜半に訪問したので、親戚のおじいさんとおばあさんはそれは驚いた。すぐに母親に連絡を取ってくれて、その日は泊まってくることになった。

まずは、おばあさんに勧められて、風呂に入る。歩き走り疲れた身体にはバスクリンの黄緑色の湯船が一番である。ふんわりとしたやわらかいお湯が、へとへとに疲れた心と体をすっきり癒してくれた。

この親戚のおばあさんは、父方の亡くなった祖母の妹で、緑内障を患って目がほとんど見えない。しかし、とても優しい人でいつも笑いを絶やさず、小柄な体つきとあいまってとてもかわいらしい感じのおばあちゃんである。

連れ合いのおじいさんはもとは鉄道マンで、大柄な体躯に白髪で彫りの深い顔は、いかにも偉丈夫という印象である。弓の名手で、将棋や囲碁も段位を持つ腕前。そしてブドウ園などの園芸栽培に釣りど、とにかく趣味が多彩である。しかも、ぼつぼつと語る冗談がとて面白くて、親戚の子どもたちはその家に行くと、

おじいさんの後を付いて回り片時も離れないのだ。

さて、湯船にゆっくりつかったあとは、お目当てのスイカとブドウである。これがうまいのなんのつてありゃしない。

ちなみに、宮崎は全国にはあまり知られていないが、尾鈴ぶどうの産地で、その品質は専門業者の間では高く評価されている。尾鈴と広瀬はかなり離れてはいるが、気候自体はそう変わらない。ブドウの品質は寒暖差の大きさと豊富な日照量といわれるが、まさに条件にぴったりの土地なのである。

スイカはこの家ではビニール栽培だが、この辺りの海岸近くの砂地で豊かに栽培されている。こちらの品質も全国で有数の折り紙付きだ。

また、夏といえば日向夏、これも宮崎の名産品だ。親戚の家の広大な庭の一角には日向夏の木もしっかりと植えてある。それをもぎ取って四つ切にして砂糖をかけて食べるのだが、ただでさえ甘いのにさらに砂糖をかけるとは、他地方の人にはなかなか理解しがたいだろう。だが、これが掛け値なしにうまいのである。

そして、梨も夏の果物として欠かせない。こちらの方は残念ながら県外品の鳥取産。

ともかくも、採れたての新鮮な果物を思う存分食べられるのだから、こんな幸せなことはない。まさに口福そのものであ

る。

苦あれば楽あり！

さんざん怖い思いをして峠を越えてきた甲斐があつたというものだ。

これも元はといえば、托鉢僧を追って、私なりのお遍路を続けた結果である。いくなれば仏様のご加護とお導き。

南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏

ズシャン、ズシャン

嗚呼 合掌！